

子どもから高齢者までスポーツの秋を楽しむ

「とよおかスポーツフェスティバル」開催

10月8日、ウエルストーク豊岡周辺で、子どもから高齢者まで、誰でも気軽に参加できる交流イベント」とよおかスポーツフェスティバル2018を開催しました。本市は、体育の日を中心とした前後1カ月を」とよおかスポーツフェスティバル月間」と位置付けています。期間中、市内各所でテニスやサッカーなどの各種大会も実施しました。交流イベントには、市民ら

約4500人が参加。ファミリージョギングやミニマラソン、大玉ころがしやパン食い競争、また、小さな子どもも体験できる「キッズチア教室」「ニュースポーツ体験」、館内では「ベビースイミング体験会」などを開催しました。

本市は、スポーツを「する」「観る」「支える」ことで、人や地域がつながり、健康で日々の暮らしを楽しむ笑顔あふれる元気なまちを目指します。



▲実業団チアリーダーによる「キッズチア教室」

「大交流の輪」をさらに広げる

「豊岡の魅力」を発信するイベント「豊岡エキシビジョン」開催

9月21日、東京で本市の取組みを紹介するイベント「豊岡エキシビジョン2018」を開催しました。このイベントは、平成21年度から開催し今年で10回目。今年は雑誌やテレビのメディア関係者の他、大手企業などから約270人が参加していただきました。

本市は今後も、一人でも多くの人が豊岡の魅力を知り、訪れ、また豊岡がメディアに取り上げられることで市民が豊岡の魅力を再認識し、さらに愛着を持ってもらえるよう取り組みます。

最初に中貝市長が、専門職大学の開学予定や、東京五輪に向けたドイツポート連盟の合宿の決定など、本市の最新

の状況を紹介した後、本市の取組みに共感し、コウノトリ育むお米など多くの商品を販売していただいている沖繩県の(株)サンエーの専務取締役中西淳さんと対談しました。



▲豊岡の魅力を語る(株)サンエーの中西さん(左)

東井義雄「いのちの教育3」教育読本(冊子)発刊

東井義雄は、子どもたちのいのちが輝く学び舎を目指し「いのちの教育」の実践・探究に尽くしました。東井は代表作「村を育てる学力」で「私は、ふるさとのあるかしこさをもった子らが、生まれてきてよかった。と言えるような、生きがいのある人生を築いてくれるにちがいない。それを念じながら」と結んでいます。

このたび、東井義雄記念館(白もくれんの念)が、旧但東町の広報紙に掲載していた記事を中心まとめた冊子「いのちの教育3」を発刊しました。青少年の健やかな成長を願った、現在の子どもたち、私たちの心に訴える内容です。サイズは、B5版36ページ。同記念館で販売しています。



300円(税込)

主な市政の動き

- 【9月】
- 15日・共同貿易日本食レストランエキスポへの出展(ニューヨーク、22日・ロサンゼルス)
- 18日・市内最高齢者・最高齢夫婦祝福訪問
- 21日・豊岡エキシビジョン2018を開催(東京都)
- 27日・「豊岡市アーティスト・クリエーター移住等促進戦略」を策定
- 28日・モンゴル国友好訪問団の受入れ(10月3日)
- 30日・「豊岡市災害対策本部(台風24号)」設置(10月1日)
- 【10月】
- 8日・とよおかスポーツフェスティバル2018
- 9日・豊岡市公営企業審議会
- 10日・「豊岡市と楽天株式会社との包括連携に関する協定」を締結
- 11日・豊岡市戦没者追悼式

観光振興やIT活用促進などで相互に協力して連携  
「豊岡市と楽天株式会社との包括連携に関する協定」締結

観光客の誘客促進や、IT技術を活用した地域経済の活性化をさらに進めるため、これまでから人材交流や多くの事業で本市と連携を行っていた。楽天(株)(東京都)と、包括連携に関する協定を締結しました。

包括連携を行う項目は、①外国人観光客への体験型アクティビティに関すること②国内外観光客誘致の促進に関すること③人材交流の推進に関すること

みんなの力で命と暮らしを守る  
度重なる台風襲来。過去最多となる「災害対策本部」設置

7月以降、風水害に対応するために災害対策本部を5回設置しました。西日本豪雨では、本市に初めて大雨特別警報が発表され、立野地点の水位が排水ポンプの停止基準まであと20cmに迫る6・96mに達するなど、合併以降最大の危機に見舞われました。

これらの危機から市民の命を守るために、本市は、本庁に災害対策本部、各振興局に地域災害対策本部を設け、市

すること④市内事業者のキャッシュレス決済の活用促進に関すること⑤ふるさと納税の推進に関すること⑥市内事業者のIT活用促進に関すること⑦国内外に向けた産品の販路拡大に関すること⑧その他、市内の経済活性化および住民の利便性向上に関すること⑨についてです。

楽天(株)と包括連携協定を締結するのは、県内の自治体としては初めてです。と消防団を中心に災害対応に当たっています。本庁の会議には、国土交通省、兵庫県、警察署、社会福祉協議会、エフエムたじまからも連絡要員が派遣され、関係機関相互の連携を図ります。

しかし、災害対応は「公助」だけでは機能しません。まず自分と家族の命を守る「自助」、災害弱者を地域で支援する「共助」の力を高めていただくよう引き続きお願いします。



▲西日本豪雨に伴う災害対策本部会議(本庁)

中貝市長の徒然日記 ⑬

When I'm Sixty Four

「僕が64歳になったら」というビートルズの歌があります。36歳でコウノトリの野生復帰を訴え始めた頃、この歌を意識して、ある同級生と約束しました。「64歳までに、家の前の川に鮎を取り戻そう」と。小学生の頃。小川を石でせき止め、一か所だけ開けた通り道に網を置いて待ち構えます。上流に石を投げ、驚いた鮎が飛び込んでくると、素早く網を上げるのです。真剣勝負、心躍る瞬間でした。

しかし、いつの間にか鮎も他の小魚も姿を消しました。県議になったばかりに川遊びを教えてくれた加藤榮さん(故人)はよくこんなことを言っていました。「子どもの頃、円山川の橋の上から川を見ると、鮎の大群が黒々と上がっていくのが見えた。自分は背が低かったので、捕まえた鮎(密漁ですが)の尾をもって担ぐと、鮎の頭が地面に届いた」と。「昔は、川の水より魚の方が多かった」。こちらは

コウノトリの飼育一筋に歩んできた松島興治郎さんの言葉です。そんな馬鹿な。しかし、それほどまでに川や水路、田んぼに生き物があふれていた時代があったのです。ぼくたちは、いったい何を失ってきたのだろうか? その心が焦れるような思いが、コウノトリの野生復帰にぼくをかき立てました。コウノトリは確かに復活しました。でも、黒々とした鮎の大群も、家の前の小川の鮎も姿を消したままです。

前の小川は、護岸はコンクリートになり、河床には自然石が敷かれています。でも魚の姿を見かけることはあまりありません。隠れる穴がなく、洪水時に流されてしまうのだろうと村人は話しています。故郷とは、大切な思い出のある場所です。でも、子どもたちの故郷の景色には、小川はもはや入っていないのかもしれない。もうすぐぼくは64歳になるというのに。

コウノトリも住める豊かな環境を取り戻すべく私たちの挑戦は、まだ道半ばです。